図230　遺跡の位置
５万分１地形図「新潟」

図231　山木戸遺跡　平成14年 オリス提供

山木戸遺跡　東区山木戸四丁目

山木戸遺跡は、海岸線から三・六キロメートル内陸に入った砂丘（新砂丘Ⅱ―四）の上にある。昭和三十年代から市街化が進み、現在はアパートや住宅が立ち並ぶ住宅街である。昭和六十三（一九八八）年に、平安時代の須恵器二点が採集されて遺跡と分かった。遺跡の範囲は、南北一五〇メートル、東西約二一〇メートルと推定されている。

平成三（一九九一）年度と六年度の二回にわたり、新潟市教育委員会が発掘調査を行い、計二〇九七平方メートルを発掘した。その結果、地表から約〇・五メートル下に堆積していた黒色砂層の中から、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代にわたる生活の跡が現われた。出土遺物の特徴は、平安時代から室町時代を通じて、京都などの遠隔地から運ばれてきた品物が多いことである。平安時代の様子を中心に紹介する。

九世紀半ば～十世紀初め（平安時代前半）の遺構では掘立柱建物跡七棟・溝二条・土坑二二基が発見された。遺物は、漁網に付

ける土製のおもり（管状土錘）、塩作り用の製塩土器、漆入りの土器、重さを量るための石製のおもり（権）、役人が着けていたとされる革帯の飾り具（石帯）、現在の愛知県や京都府で生産された緑釉陶器・灰釉陶器などを含む多量の遺物が発見された。船着場を示す遺構は発見されていないが、漁具や、遠くから運ばれてきた遺物の存在から、漁に出たり、水上交通を積極的に利用した様子がうかがえる。

図232　緑釉陶器の椀・皿　いずれも内面

また、十二世紀末～十四世紀前半（平安時代末～鎌倉時代）にかけての遺構では、掘立柱建物跡一棟と井戸一七基などが発見された。遺物には、この時代では高級品であった中国産の白磁皿や青磁碗などが含まれていた。

これらのことから、平安時代前半の九世紀半ばから十世紀初めごろは、漁港や都へ納める品を運ぶ港の補完施設として機能し、その後、平安時代末から鎌倉時代にかけて、中国製の高級磁器も運ばれて来るようになり、多様な品々が行き交う交易の場と変化していったものと思われる。今後、蒲原津や周辺にあったと思われる港と、山木戸遺跡のかかわりを調べていくことが課題である。